

「阪大ニューズレター」
社会と大学を結ぶ季刊情報誌

Handai

SEASONAL MAGAZINE

NEWS

Letter

Published by OSAKA UNIVERSITY



No.41

2008/Autumn

発行日：平成20年9月1日
発行：大阪大学
大阪府吹田市山田丘1-1
06-6877-5111
ホームページ：
<http://www.osaka-u.ac.jp>

●特集・平成20年度グローバルCOEプログラム ― 5

医学・数物・機械・社会の分野で4件が採択

●社会学連携 ― 平川秀幸 ― 7

研究・調査で市民と大学が連携

「リサーチリテラシー」を鍛える

大阪大学サイエンスショップ「短期研究調査プロジェクト」が発進

OG訪問 ― 高木佐知子・大阪府立大学人間社会学部言語文化学科准教授 ― 9

元気です！在学生 ― 西岡直毅・経済学部4年生 ― 10

健康 ― 慢性呼吸不全に対する外科治療―肺移植の現況と肺再生医学の展望―
― 奥村明之進 ― 11

心理・行動 ― 食行動の動機づけと味覚情報 ― 志村 剛 ― 12

研究室紹介 ― 分子モーターでATPを合成 ― 野地博行 ― 13

阪大ニュース ― 第40回大阪大学中之島講座のご案内 ほか ― 14

「大阪ルネサンス」掲げ天神祭船渡御出航 ほか ― 15

◎総長カフェ 21世紀懷徳堂ライブ ― 1

若者は自分と格闘する

香山リカ×鷺田清二



うつの時代、心の危機に抗して――

●立教大学現代心理学部映像身体学科教授――香山リカ Rika Koyama
●大阪大学総長――鷺田清一 Kiyokazu Washida



若者は自分と 格闘する

約20年前、『リカちゃんコンプレックス』で鮮烈に登場した香山リカさんは、精神科の臨床経験に裏打ちされた人間観察眼で現代社会をとらえ、鋭い批評の言葉を放ち続けている。

臨床哲学を専門とする鷺田総長と、若者の心の問題を中心に語り合ってもらった。自分を否定するにしろ肯定するにしろ、自分といかに格闘するかが問題だ。

優等生っぽい子は先生の期待通りに行動するけれど、
さめた子は期待に沿うように行動している自分の器用さみたいなものを否定しようとする。
そういう意味で、今は自己否定的な感情がたまっているのではないかと思うのです。（鷺田）

うつ病になりたがる人

鷺田 香山さんは最近、次々に出版された著書の中で、若者にも増えているうつ病について述べています。うつ病と診断されずに、うつ病的と言われたりすると、かえって不安になるとか。「あなたはどううつ病です」と決めつけてもらったほうが楽なんですね。

香山 たとえ病気であっても、何か核になるアイデンティティーがほしいということだと思ふのです。うつ病に見舞われて、それと闘っているという物語のほうに分かりやすい。「うつっぽい感じだけど、うつ病じゃない」と言われると曖昧模稜として、治療される病人という受け身の立場ではなく、自分で課題に取り組まなければいけなくなります。

鷺田 香山さんは、うつ病の人やうつ的な人の共通の特徴として、自分はこの扱いを受ける人間ではない、もっと大切にされて当然だ、不本意だという意識に言及しておられます。その一方で、現実の自分を出来損ない、生まれ損ないみたいに感じているという。

香山 自己肯定感は低いんだけど、一方ですごく自己愛が強い。だから、生まれなければよかったとか、親は誕生を望んでいなかったんじゃないかという出生の問題にまで立ち返る傾向がある。さらに、スピリチュアルの前世占いなどに頼ることになる。

その場に応じて自分を变える

香山 私は大学の最初の授業で、もし何にでも変身できるとしたら何になりたいかを言いながら自己紹介してもらいます。そうすると、例えば坂本龍馬、ロナウジーニョ、あるいは透明人間になりたいとかいう人はいません。多いのは、大きな木、森の中の鳥、深海魚、猫、無生物系では翡翠などの鉱物です。

鷺田 めだたなく、寂しい感じがします。ネガティブなひっそりとしたイメージですね。

香山 ひっそりとしているけれども、大木や翡翠などは悠久の時を感じさせます。理由を聞くと「ゆっくりしたいから」、あるいは「人に疲れた」という答えが返ってきます。どうして疲れるかという点、期待される役割を演じてしまうからでしょう。

鷺田 以前、学生と話していて驚いたことがあります。東京大学の教養学部で集中講義を行ったときのこと、授業が終わってから研究室に戻り、「信

頼できる人ってどんな人？」と聞いたのです。ある学生が「自分たちはいろんなグループに属しているけれど、それぞれのグループの中できちんと振る舞える人」と答えました。つまり、そこで期待されている役割をきちつと演じることが出来る人、いわゆる「KY」でない人、空気が読める人ということでしょう。ほかの学生にも聞いてみたら「私もそうだ」と。しかし、私にとって信頼できるのは、どこへ行っても変わらない人であり、行く場所によつて話し方や表情を变えるような人間は信用できないというイメージでした。

香山 その場その場で自分の立場を変えて、ちよつと大げさに言うとか多重人格のように、人格までも変えられるほうが信用できるということですよ。

鷺田 大人の連中だつて、会社では社員らしく、家に帰ったら親父らしくやっているから、私のほうが間違っているのかなという気もしましたが、でもやっぱりそれは信用できませんあと思いました。私などよりよっぽど大人つ

ばいなおとも感じました。壊れないために演じ続ける

香山 子どもは無邪気で自然に振る舞うというのではなくて、子どもだからこそ親や教師の期待に沿うように先読みして振る舞うところがあります。

いじめにあつてはいる子どもたちの話を聞くと、いじめられたことを親に言っていない子が多い。「なんで話さないの？」親に言つても分かつてもらえないの？」「親のこと大好きだ」と言うのです。

「じゃあ言えばよかったじゃない？」と言うと、「親に言つたら親が悲しむから可哀そう」「自分の子どもがいじめられてると知つたら親が落ち込むから」とか、親の前ではいじめられていない子を演じている。

自殺を考えたという子も、いじめから逃げようとして自殺するというより、演じることに疲れちゃつて、いじめを隠して親や教師の前で元気に振る舞うのに疲れ切つて自殺しようとしているのかなあと思えてきます。

鷺田 演じていることを意識しないで演じられている間は、まだ楽ですよ。

優等生っぽい子は先生の期待通りに行動するけれど、さめた子は期待に沿うように行動している自分の器用さみたいなものを否定しようとする。そういう意味で、今は自己否定的な感情がたまっているのではないかと思うのです。

香山 それはもちろん相手を思いやつてしているのだろけれど、演じない



「私はここにいていいのか、生きていていいのか」という問いにとらわれることがあるだろう。自分が自分である理由を、決定的に与えてくれるものが恋愛だ、と言いました。（鷺田）

自分が自分である理由

で素顔のままだと嫌われるんじゃないか、空気が読めないと思われるんじゃないかというおびえみたいなもの、演じない自分への自信のなさがあるようです。それは自分が壊れるのが怖いというか、お母さんお父さん友達との関係が壊れることが怖いということにもつながってきます。

鷺田 若いとき、特に10代から20代前半にかけて、自分というものがよく分からなくて、あるいは居心地が悪くて、格闘する時期があると思うのです。内に抱え込む場合もあるし、ふさぎ込む場合もあるし、荒れる、暴れる場合もある。今の若い人たちのものがき方、表

現の仕方は、私たちの若いころとは違うと思うんだけど、その根底にある本当の問いかけはそんなに変わらないんじゃないかな。

私の場合は、自分というものと格闘しながらも、逆に自分が壊れるほうへ自分を持つていきたいという思いが、ずっと10代からありました。壊れるのが怖いというよりも、自分が嫌になる。なんで自分はいつでもこんなやろう、これを何とかしたい、こんな自分でいたくない、そういう自己否定がかつての世代にはけっこう強い。同時に、自分がなぜこうなのか知りたいという思いがある。

若い人は、他人になくて自分にしかないものって何だろうか、一生懸命

自分探しをするけれど、いつも答えは出てこない。

香山 その点、「あなたに出会うために生まれた」みたいな恋愛は、とても分かりやすい。

鷺田 そのとおり。私は以前、恋愛を語る語り方が、自分と若い人たちとは違う感じがして、何か衝撃的なことを言ったほうがいいのかと思うて授業で話をすることがあります。激しい恋愛は若い時代にするもんやと君らは思っているが、とんでもない。人間は年を取るほどのつぴきならない恋愛に陥る。介護施設での恋愛は、もう命がけだ。君らは若いから労働力としても期待されるけれど、年いったら自分ひとりでできることがどんどん減ってい

き、最後は面倒を見てもらわなければならなくなつて、自分に存在理由があるのか不安になる。そんなときに「あなたがいないと生きていけない」とか言ってもらえたら、まさに命がけの恋になる。

人間は、自分がここに理由を絶えず感じていたいし、それが生きる支えになる。君らも「私はここにいてい

●鷺田清一(わしだ きよかず)
1949年京都府生まれ。大阪大学文学部教授、文学研究科長、理事・副学長を経て、2007年8月に大阪大学総長就任。専門は臨床哲学、倫理学。



演じないで素顔のままだと嫌われるんじゃないか、
空気が読めないと思われるんじゃないかというおびえみたいなもの、
演じない自分への自信のなさがあるようです。（香山）

自分の存在を 肯定してくれるもの

いのか、生きていていいのか」という問いにとらわれることがあるだろう。自分が自分である理由を、決定的に与えてくれるものが恋愛だ、と言いました。

香山 子どもって、どうなんですか。

鷺田 私にはあなたしかいないという意味では、子どももそうですね。

香山 ペットも、あなたが必要ですということを更新してくれま。私は犬と猫を飼っていますが、犬なんて、帰って来るたびに飛びつくでしょう。猫もニャーンと鳴いただけで、「私のことがそんなに好きなのね」とか、勝手に言葉を作れるじゃないですか。

とっても便利な装置だと思うんですよ。自分も含めて、依存し過ぎている人が多いので、それはそれで困ったものだと思いますが。

鷺田 私も同じで、やっぱり犬にじーっと見つめられて、おろおろしてしまうことがある。

香山 犬や猫は、今の自分の存在を肯定し、あなたが必要だと言ってくれます。

鷺田 ちょっと怖いと思うのは、子どもが自分は愛されていないんじゃないかというときに、大人はすぐに心のケアみたいなふうに話を持っていくでしょう。では、心のケアは誰がするのかというと、心の専門家がする。その構図にすぐ抵抗があるのですが、か

といって地域社会のコミュニティなどが再建されることはあり得ない。今は見えないふりをするけれど、かつては隣近所に見えないふりしてちゃんと見ていた人がいた。

香山 大阪って、そういうところが残っていないですか。大学に行く途中、電車の中でパソコンを開いていると、度々「それ何？」って話しかけられるんですよ。「いくらぐらいするのん？」

「おばちゃんにもできるやろか」。こっちも急いでいるので、ついつい冷たい対応になるのですが、ちよつと丁寧にお答えしたら「これ持っていき」と、ドーナツ一ついただいたりして（笑）。鷺田 私は京都で育ちました。京都は他人の領域に入り込むのをものすごく

嫌う文化なんです。大阪で30年以上働いているけれども、ショッキングなことでだらけ。堂島の喫茶店で注文を聞きに来たおばちゃんに、いきなり「あんたその眼鏡どこで買ったん」と言われて面食らったことがあります。こういう話は尽きませんので、ぜひまた次の機会に。今日はありがとうございました。

●香山リカ（かやま りか）
1960年北海道生まれ。東京医科大学卒業。精神科医。立教大学現代心理学部映像身体学科教授。『スピリチュアルにハマる人。ハマらない人』『なぜ日本人は劣化したか』『ポケットは80年代が面白い』など著書多数。



平成20年度グローバルCOEプログラム 医学・数物・機械・社会の分野で4件が採択

国際的に卓越した教育研究拠点の形成を図る文部科学省の「グローバルCOEプログラム」に本年度は、大阪大学から4件が採択されました。プログラムの概要を紹介します。

医学系

「オルガネラネットワーク医学創成プログラム」



●拠点リーダー
米田 悦啓 教授
生命機能研究科

本拠点は、二つの21世紀COEプログラム「疾患関連糖鎖・タンパク質の統合的機能解析」と「感染症学・免疫学融合プログラム」が推進してきた世界最高水準の教育研究拠点形成の成果を融合し、さらなる展開を目指して計画された。つまり、さまざまなオルガネラ

(細胞内器)を対象として研究する細胞生物学、オルガネラの構築に必須の役割を果たす糖鎖サイクルを研究する糖鎖生物学、オルガネラを極めて巧みに利用して子孫を増やそうとする病原体と宿主細胞のインターフェースを研究する感染症学を融合することにより、オルガネラネットワーク医学と呼ぶべき、新しい医学の分野を開拓する。その成果を基盤として、感染症、神経筋疾患、免疫疾患、癌、生活習慣病や老化など、従来の分子レベルの解析のみでは解明できない、多くの因子や環境が複雑に絡み合う病態の解明と治療に新たな視点の導入と展開を可能にする、世界で唯一の教育研究拠点の樹立を目的として進める。

数学、物理学、地球科学

「物質の量子機能解明と未来型機能材料創出」



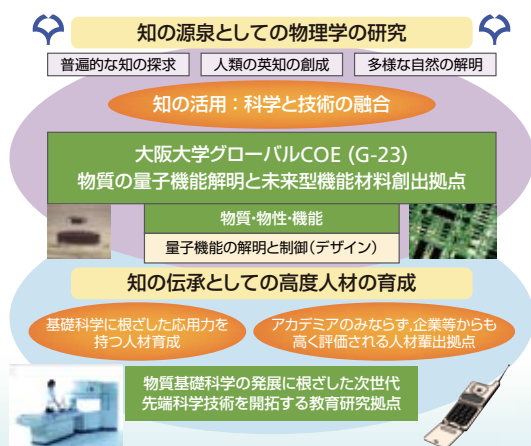
●拠点リーダー
北岡 良雄 教授
基礎工学研究科

量子力学に基づく物性物理学は半導体、磁性体、超伝導体、レーザーといった先端科学技術に必須となっている機能材料の発見やその機能を生み出す原理を次々と解明してきた。ここ数年で、従来の無機物から有機物、生体物質に至るまで広くカバーできることが明らか

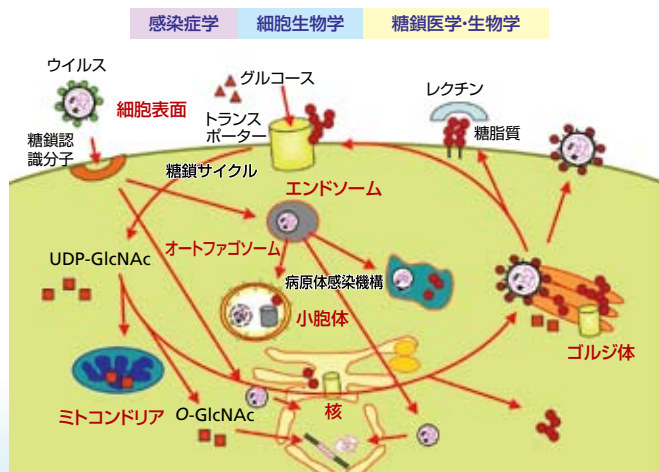
かにされつつあり、この分野は大きく学際融合的に発展している。21世紀の増大するエネルギー需要に応えるため省資源で環境にやさしい次世代先端科学技術の開発が人類的な重要課題となっている現状を踏まえ、本拠点では以下のような研究教育活動を展開する。

- 1 物質の新しい量子機能の解明を通して「物質科学における未踏の学理の確立」を目指す基礎研究。
- 2 多様な自然の解明と共に知の活用として、分子エレクトロニクス、スピントロニクス、オプトロニクス、量子情報処理にかかわるクオントロニクスなど次世代先端科学技術分野を開拓する先端応用研究。

▶物質の量子機能解明と未来型機能材料創出拠点



▶研究の柱：オルガネラネットワーク医学創成



Global COE Program 2008

3 発想力にあふれた研究者・技術者、課題設定・解決能力のある、打たれてもへこたれない「出る杭人材」の育成。本拠点の事業推進者は、基礎工学研

●機械、土木、建築、その他工学

「高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点」



●拠点リーダー
山内 和人 教授
工学研究所

本拠点は、物づくりにおける原子レベルの制御性と環境調和性の実現をめざした高機能化原子制御製造プロセス

●社会科学

「人間行動と社会経済のダイナミクス」



●拠点リーダー
大竹 文雄 教授
社会経済研究所

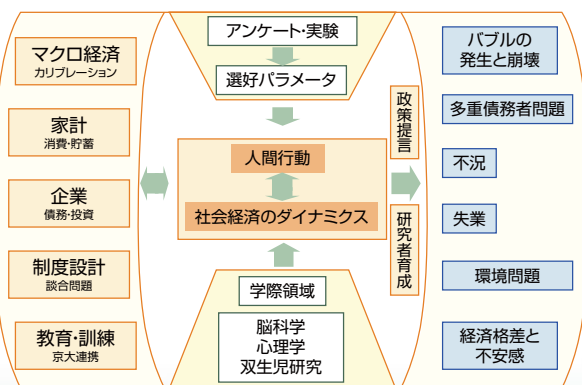
本研究拠点は、経済実験・アンケートといった新しい研究方法の利用と脳科学・心理学・社会学等の他分野の研究と伝統的な経済学との融合によって、現実の人間行動をもとに社会経済のダイナミクスを明らかにし、現代の経済問題の解決方法を提示するとともに、若手

究科物質創成専攻(11名)、システム創成専攻(3名)、理学研究科物理学専攻(3名)、宇宙・地球科学専攻(2名)、極限量子科学研究センター(2名)、産

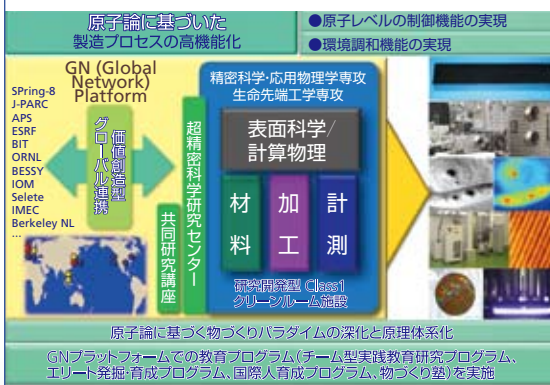
の創出を目的とする。国内外の教育研究機関との広範な連携によって、基礎科学から応用、融合分野の創出に至る一連の階層をつなぐGN(Global Network)プラットフォームを構築し、幅広い学問基盤と国際感覚、異分野との融合能力を備えた、次世代製造プロセスの開発を担う若手研究者を育成する。研究面においてもGNプラットフォームを活用した価値創造型グローバル連携を展開し、このことを通じて、原子制御製造プロセスの真の深化と学術的体系化を推進する。

研究者を育成することを目的としている。伝統的な経済学は、人々が合理的に行動することを前提にして、さまざまな社会経済現象の説明に成功し、経済政策の指針を提供してきた。しかし、近年その限界も明らかになってきた。例えば、不況、バブルの発生と崩壊、多重債務問題、環境問題、経済格差といった問題は伝統的経済学では必ずしも十分に説明できていない。このような伝統的経済学の弱点を補完するのが、現実の人間の行動特性を前提として経済学の再構築を試みている行動経済学である。本研究拠点は、伝統的経済学・行動経済学の研究・教育を通じて社会経済問題の解決に貢献する人材を育成する。

▶人間行動と社会経済のダイナミクス



▶高機能化原子制御製造プロセス教育研究拠点



業技術総合研究所(1名)、情報通信研究機構(1名)に所属する研究者から構成されており、協同して先端教育研究拠点の形成を推進する。

研究・調査で市民と大学が連携 「リサーチリテラシー」を鍛える

大阪大学サイエンスショップ「短期研究調査プロジェクト」が発進

● 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD) 准教授
平川秀幸 — Hideyuki Hirakawa
E-mail: hirakawa@cscd.osaka-u.ac.jp

日本初の本格的な大学設置型のサイエンスショップとして、2007年4月に誕生した大阪大学サイエンスショップが、今年7月から「短期研究調査プロジェクト」を開始した。研究・調査を核に、地域社会と大学を結ぶ社学連携の新しい展開が期待される。



▲水辺まつりでの報告



(写真左)猪名川・藻川の水質調査プロジェクトを担当したサイエンスショップ・スタッフの中川智絵さん。京都大学大学院生命科学研究所博士後期課程1年。(写真中央)平川秀幸准教授。(写真右)「サイエンスショップ・リサーチマニュアル(虎の巻)」を作成した山内保典・コミュニケーションデザイン・センター特任研究員。専門は認知心理学。

サイエンスショップは、地域の市民や市民グループ、NPO・NGO、学校関係者など「利用者」からの相談・依頼をもとに、学生(学部生・大学院生)、ポスドクなどが主体となつて、相談への回答や研究・調査を行い、利用者の問題解決や社会活動をサポートする組織だ。関連分野の教員は、アドバイザーとして助言・指導を行い、研究の質を高める。

大阪大学サイエンスショップは、昨年4月にコミュニケーションデザイン・センターの社学連携および教育事業の一環としてスタート。試験プロジェクトとして、猪名川・藻川の水質改善に関する調査を実施した。これは漁協関係者と市民グループからの依頼で、「猪名川・藻川の魚を食べても安全なのか?安心して食べるには?」という疑問に応える調査である。工学部と薬学部の院生、ポスドクを含む阪大生のボランティアらのメンバーが、実地調査でアユ・ウナギなどの捕獲・試食を行い、水辺まつりで検査結果を報告した。

これは半年以上にわたる調査だったが、「短期研究調査プロジェクト」は、1〜3カ月程度で解決できる比較的簡単な課題を設定している。市民の疑問を解決することにより、学生の「リサーチリテラシー(課題設定力・解決力、他分野の理解力、企画・運営力、コミュニケーション能力など)」の基礎体力を強化する狙いがあり、非専門・学部生でも参加可能である。同時に、サイエンスショップ運営ノウハウも抽出する。

6月下旬に学生向けガイダンスを開催。

その後、プロジェクト参加希望学生に対し、これまでサイエンスショップで収集した取り組み課題から次に挙げる9課題を提示し、選択してもらった。

課題はいずれも興味深く、さまざまな視点からの調査が求められるものばかりで、すぐには答えの出そうにないものもある。

- ・ 3秒ルールの真実を探れ!
- ・ 宇宙の色は何色?
- ・ なぜ人はモンスター化するのか?
- ・ 大学生が裁判員に選ばれたらどうなるの?
- ・ ロボットと恋に落ちることが出来るか?
- ・ 真空中の俺の血は沸騰するのか?
- ・ 血液型と性格には関係があるのか?
- ・ まんが、ゲームの悪影響?
- ・ 社会はAI(人工知能)で制御できるのか?

すでに7月から、3人の院生が1チームを作つて試行的にリサーチを開始している。8月からは、学生たち自身が独自に設定した課題について、もう一つ別のチームが作られている。今後、サイエンスショップは21世紀懐徳堂に窓口を開設し、学外から研究・調査案件を一般募集する予定である。

サイエンスショップは現在、コミュニケーションデザイン・センターの平川秀幸准教授(科学技術社会論専攻)を中心に、5人のスタッフが担当している。



猪名川・藻川の水質改善に関する調査報告を掲示(水辺まつり)

Research Literacy

INTERVIEW

● 平川秀幸准教授に聞く

知識基盤社会の

「科学相談所」として

——サイエンスショップの歴史や各国の状況は？

サイエンスショップは、1970年代初めにオランダのユトレヒト大学で始まり、その後、オランダ各地の大学、デンマークやドイツ、英国など欧州各地に広がり、現在は欧州全体で70カ所以上あるといわれています。その流れとは別に、アメリカにも「コミュニティ・ベイス・リサーチ



チ(CBR)」と呼ばれる活動が60年代ごろからあります。90年代以降は欧米間の交流が盛んになり、2000年代に入ってから国際サイエンスショップネットワークが立ち上げられ、情報交換やトレーニングプログラム等の研究開発、国際会議の開催などを行っています。さらに、従来サイエンスショップがなかったアジア地域やアフリカ、旧東ヨーロッパバ

の国々にも広がっています。欧州連合の行政執行機関である欧州委員会の支援もあって、世界的な広がりを見せています。日本でも、大学の研究者や専門家が市民の要望に応える形の研究・調査は、60年代以降、公害問題が大きくなった時代から各地で行われていました。ただ欧米との違いは、研究者個人あるいは研究室による対応にとどまっていた、組織として制度化されなかったことです。

——大阪サイエンスショップの特徴は？

大阪大学の社会学連携全般的窓口が21世紀徳意堂ですが、サイエンスショップはその中で特に研究・調査のニーズに応えるための窓口になります。法律問題を扱

う法律相談所のように、市民向けの科学問題を扱う「科学相談所」のイメージです。自然科学はもちろん、社会・人文科学の分野も含まれます。

最近「知識基盤社会」といわれますが、知識には経済的な価値以外に、政治的な価値もあります。政策を決める際には、環境問題や地球温暖化問題など、科学の知見が必要です。研究者や高度専門職業人だけでなく、知識基盤社会の現代に生きる市民にとっても、生活の中で疑問に思ったことについて、専門分野にとらわれず、調べ、考え、他者とコミュニケーションするための素養である「リサーチリテラシー」が重要です。

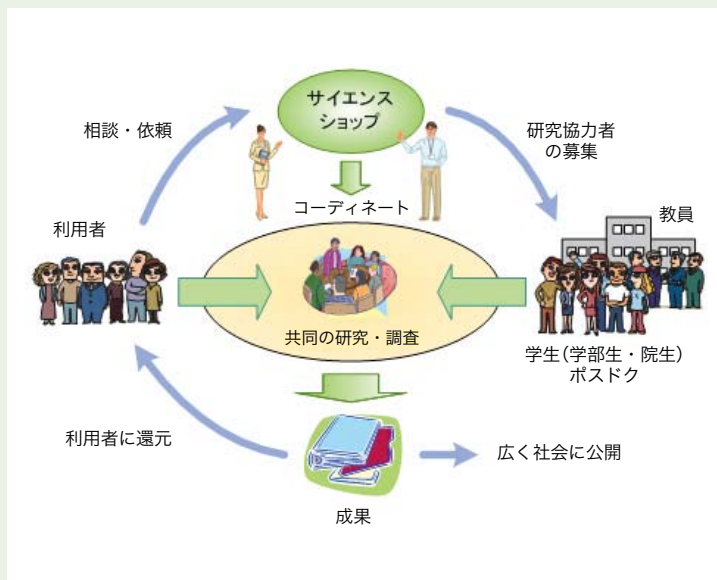
まず問題を見つけたところから始めて、実際に研究・調査できる具体的な問いを展開し、計画を立てて研究・調査を実施し、分かりやすい形にして公表する一連の活動を通じて、課題設定能力をはじめとするリサーチリテラシーが鍛えられます。

——今後の展開や将来構想は？

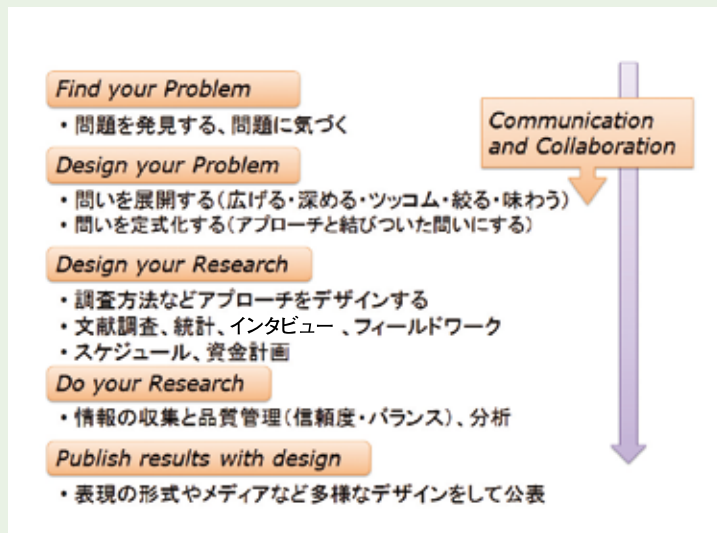
研究・調査だけではなく、科学技術コミュニケーションの対話的手法を用いて、コンセンサス会議やワークショップをデザインし、その運営をお手伝いすることを考えています。例えば、遺伝子組み換え作物について農家の人、消費者、行政、企業、研究者などを集めて、お互いの理解を深めるような提案や組織の運営に役立つことです。

また、大学院高度副プログラムや学部基礎ゼミで、サイエンスショップ科目の提供も構想中です。

▼サイエンスショップのイメージ



▼リサーチリテラシーの構成要素



●高木佐知子(たかぎ さちこ)氏

1960年奈良市生まれ。1983年大阪大学文学部文学科卒業。外資系銀行勤務等を経て、93年同大学院言語文化研究科博士前期課程入学、98年同研究科博士後期課程単位取得退学。同研究科助手を経て、2000年大阪府立大学総合科学部講師。現在、大阪府立大学人間社会学部准教授。博士(言語文化学)。日本時事英語学会副会長。

中学1年生の時から英語が好きになり、英文学専攻の学生時代はESSに所属。卒業後は外資系銀行に勤務。「男女雇用機会均等法が施行される前で、外資系といっても女性にあまり期待していない、男性社会というものを強く感じました。主に貿易事務の仕事に従事していたのですが、将来への展望がつかめず、自分がもっと積極的にかかわることのできる仕事をしたいな」と偉そうなことを考えて、2年足ら

ずで退職してしまいました」その後、2度の転職の後、他の外資系企業に勤務。結婚、出産を経て、1990年にアメリカ・カリフォルニア州に住むことになり、その時、地元大学の授業に参加したのが、英語教育に強い興味を持つきっかけになった。92年に帰国してから半年後、大学を卒業して10年後の93年の春、大学院言語文化研究科の第5期生として入学。言語コミュニケーション論コースの中



大阪大学文学部を卒業した高木佐知子さんが研究者を志して大学院の言語文化研究科に入学するまで、ちょうど10年間のブランクがあった。その間に経験したことを含めて現実の社会や日常生活のあらゆる言語活動が、いま研究対象になっている。言語学って、こんなに身近で面白かったのかしら？

OG訪問
大阪府立大学 人間社会学部言語文化学科 准教授 — 高木佐知子 — Sachiko Takagi

言葉から人間と社会を考える 日常会話やメディア報道に潜むメッセージを探求

に社会言語学の講座があり、「私たちがふだん使っている会話そのものが研究対象になるのが、非常に新鮮でびっくりしました」。英語教育よりも社会言語学に焦点が定まり、津田菜教授(現名誉教授)の指導を受け、研究にいきむことになった。「大学院の勉強は本当に大変でしたけれど、言文の院生には私のような社会人経験者も多く、お互いに励まし合いながら頑張ることができたのがありがたかったです」

社会言語学の中で、高木さんの研究の中心は「談話分析」といわれる分野。言葉が人間同士のかかわり方や社会的な背景とどのように関連しているかを探り、英語や日本語のデータを分析して隠れたメッセージを明らかにしていく。その研究対象となるデータは日常の何気ない会話から、メディアの報道、テレビのトーク番組やドラマまで幅広い。

近年はイラク戦争やイラクでの日本人被害報道に潜むイデオロギーを考察し、それがニュートラルな表現ではないことを指摘する論文を発表している。現在は、沖縄の少女暴行事件に関して、米国と日本の新聞の記事内容を比較



し、違いを分析している。前者は起こった事件を中心に述べて日本との関係は良好であるとするが、後者は過去の同様の暴行事件や沖縄以外の事件も取り上げ、駐留米軍に対する怒りや不満を表象しているという。さらに、被害者の少女と加害者の海兵隊員のどちらに重点を置くかによって、書き方や構成が大きく異なるそう。

他者を意識した多面的会話の観点からインタビュー番組にも注目。インタビューアーは視聴者の代表であり、視聴者とゲストの間に介在する独特な存在であり、メッセージがどう伝わるかを追究している。

大阪府立大学のゼミでは、談話分析の手法を実際に応用するために日本のテレビドラマも使っている。「最初はそっけなかったのが恋愛に変わっていく過程、誤解が生じる原因など、微妙な二人の関係が言語学的に明らかになります」。談話分析の材料には事欠かない。「夫と娘の最中も、会話のストラテジーがすぐく気になり、これを記録して分析したいと思うときがあります」



●西岡直毅(にしおか なおき)
1986年京都府生まれ。洛南高等学校卒業。経済学部4年生。大阪大学体育会テコンドー部に所属。2007年12月、第1回全日本テコンドー選手権大会準優勝。2008年2月、第1回全日本学生テコンドー選手権大会優勝。

長い足と頭を使って「蹴る」

テコンドーの全日本選手権で準優勝、全日本学生選手権で優勝

●経済学部 4年生
西岡 直毅——Naoki Nishioka

大阪大学体育会テコンドー部の西岡直毅さんは、今年2月、第1回全日本学生テコンドー選手権大会の男子ライト級で優勝を果たした。昨年12月には、社会人も参加する第1回全日本テコンドー選手権大会で準優勝。敵と戦う前に、けがと闘う苦しかった時期を乗り越えて、一気に実力を開花させた。

「けががターニングポイントになりました。けがで入院するまでは鳴かず飛ばずの選手でした。高校2年の終わりが、手を激しく打って病院に行ったら骨は折れていないという診断だったのですが、大学2年の夏に別のところをけがして診てもらった際に、手首の古傷が大きな複雑骨折だったことが分



かりました。2回の手術を受け、1カ月以上入院生活を送り、リハビリにも長い時間を割きました。半年近く練習も満足にできなかったのですが、はやる気持ちを抑えて練習を見たり、強い人の試合の映像などを見て研究しました。蹴りの質や速さ、体のつくり方などを知ると、自分にはこれが足りないというところが分かりますし、こうありたいという理想もできてきます。それに合わせるようにどんどん練習を積み重ねると、気がついたら今の自分がありました」

一昨年2月の全日本学生選手権には、手首にボルトが入ったまま出場した。「ここを蹴られたらもう手を使えないようになるぞ」と注意しつつ、「止めてもどうせ黙って出るやろから」と言ってくれた医師に、試合の前日、患部を固定してもらって試合に臨んだ。中学生時代にバスケットボールをやっていた西岡さんは、高校入学後、近所の道場でテコンドーを始めた。授業が7時間目まであってクラブ活動が

できなかったため、体を動かす程度の気軽な気持ちからだった。しかし、だんだんテコンドーの魅力に取りつかれた。

「蹴りで競い合うので、足が長いほうがいい。他の格闘技は、細長い体型の自分には向いていませんでした。テコンドーは素早い動きが要求され、手足の長いことが強みになります。また、ただ我慢して蹴り合うという競技ではなく、相手の裏をかき、フエイントをかけて蹴るなど、頭を使うところも面白さの一つです」

大阪大学のテコンドー部はまだ歴史が新しいが、全国大会で実力を発揮している。西岡さんが優勝した全日本学生テコンドー選手権大会では、女子の部で3人の部員が各級で優勝した。強豪校には師範がついているが、阪大には師範がいなかった。主将を中心に、自分たちで技を磨き、後輩に伝えてきた。「実際にノウハウが完成したのは、つい最近なんです」という。

「多少つらいことがあっても、あきらめずに練習を続けていたら、絶対に力がつくし、やった分は自分の糧になる。結果が出なかったとしても、今後自分が生きていくうえで力になると思います」

今は、前回2位に終わった12月の全日本選手権大会に照準を定めている。充実した学生時代の総決算のつもりで挑む。「試合では緊張しますが、相手より自分は強いと言い聞かせるようにしています」

健康

慢性呼吸不全に対する外科治療
肺移植の現況と肺再生医学の展望大阪大学大学院医学系研究科 外科科学講座
呼吸器外科 教授

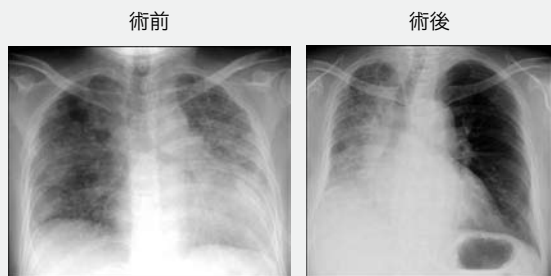
奥村明之進 — Meinoshin Okumura

E-mail: meinoshin@horacic.med.osaka-u.ac.jp



癌は本邦における3大死因の一つであり、とりわけ肺癌による死亡者数の増加は著しく、肺癌の診断と治療技術

図1 左肺移植術の手術前後の胸部レントゲン



の発展は不可欠である。実際、私達、呼吸器外科専門医が診療・研究に最も力を投入しているのは肺癌の外科治療である。本邦の肺手術の完成度は高く、小型早期肺癌の発見頻度の増加に伴い切除率、術後生存率とも向上していると思われる。また近年の3次元照射・重粒子線治療・分子標的療法の開発・導入は手術不能の肺癌患者への治療機会を増やしており、肺癌診療における着実な進歩が見られている。

その一方、肺癌以外の呼吸器疾患の中には、いまだ難治性で予後不良な疾患が多数存在する。中には今後の本邦における重大な健康問題となる可能性の高い疾患があり、例えば胸膜悪性中皮腫が増加することが予想され注目を集めている。

本稿では、これらの悪性腫瘍以外に今後の国民健康にとって多大な脅威となることが予測される肺気腫(COPD)をはじめとする、慢性呼吸不全に対する当教室の取り組みを紹介する。

現代医療の限界である重症臓器不全に対する治療としては、臓器移植が最も有効な方法と考えられている。本邦における肺移植は、1999年の岡山大学での生体肺葉移植にはじまり、2000年に大阪大学と東北大学で行われた本邦初の脳死肺移植も含めて、2007年までに計99例の肺移植手術(脳死肺移植36例、生体肺葉移植63例)

が行われてきた。大阪大学では11症例に対して12回の脳死肺移植手術(1例は再移植施行)を行ってきた。本邦第1例目の肺移植症例(特発性間質性肺炎に対する左肺移植術)の術前・術後の胸部レントゲン写真を図1に提示する。移植された左肺が良好に機能していることが伺える。この症例も含めて、11例中10例は健在である。また、大阪大学でも生体肺葉移植は8例実施しており、合計20例の肺移植を行ってきた。

しかしながら、移植医療には、脳死ドナーの出現が限られていることと、生体ドナーの手術リスクが看過できないことなどの問題点がある。その一方で、肺気腫をはじめとする閉塞性換気障害の患者は増加しており、2020年には全世界の死亡原因の第3位になることがWHOにより予測されている。したがって慢性呼吸不全に対する、肺移植以外の新たな治療戦略の構築が必要である。

我々は慢性呼吸不全に対する治療手段の可能性の一つとして再生医療に注目し、肺再生に関する実験的研究を行っている。現在までに、ラットを用いた肺再生の実験的研究により、遺伝子導入によるHGFの発現が肺胞・肺血管の再生をもたらすことと、ラット肺気腫モデルにおいて肺容量減少手術とHGFの外的補充が肺再生と運動能

力を改善させることを明らかにしてきた。現在、我々が開発に取り組んでいる治療法は、脂肪組織由来の幹細胞を増殖因子供給源として活用する方法である。すなわち、脂肪組織由来のCD34⁺の幹細胞をネオバールシート上で培養し、肺気腫モデルにおいて気腫肺の切除部分に貼付し肺再生を促す方法で、ラットモデル実験においてその可能性を示した。肺気腫に対するこの新たな治療戦略を図2に示す。自己の脂肪細胞由来の幹細胞の使用が現実のものとなれば、ウイルスベクター使用の危険性が回避される。

今後、慢性呼吸不全治療の新たな展開としての再生医療を確立し、臨床応用へつなげていきたいと考えている。

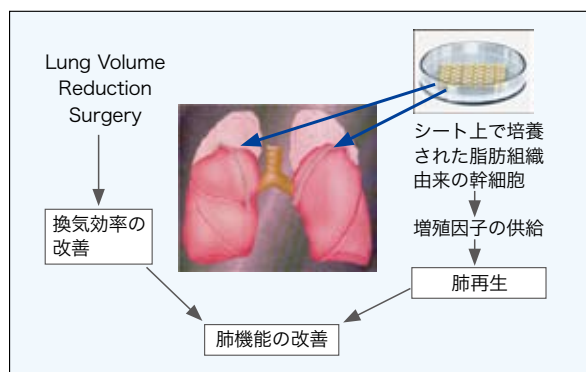


図2 肺気腫に対する肺再生医学の応用

■心理・行動

「食行動の動機づけと味覚情報」

人間科学研究科 行動生態学講座

行動生理学研究分野 教授

志村 剛

Tsuyoshi Shimura

E-mail: shimura@hus.osaka-u.ac.jp



■おいしさは必要以上に食欲を駆り立てる

先日の夕方5時前、うらぶれたマーケットの一角に、数人の行列ができているのに出くわしました。あとで家人に話すと、評判のラーメン店らしいということでした。なぜ、時分どきでもないのに、行列をしてまでラーメンを食べようとする人がいるのでしょうか？そのラーメンは、それほどおいしいのでしょうか？

私たち人間を含めて、動物の食行動は生きていくために必要な栄養素を取り入れる最も重要な行動のひとつです。生きている限り、絶えずエネルギーを消費しますから、定期的に栄養素を食物として補給する必要があります、どんな動物でもそのための身体システムを備

えています。つまり、栄養素が欠乏し空腹になったら、食物を探し、そして食べるという一連の行動が現れます。

このように、ある行動を生じさせ、方向づけ、維持させ、終結させる原動力を、心理学では動機づけと呼んでいます。食の動機づけは非常に強く、基本的には、体内の栄養状態をモニターする生まれつき備わった神経回路のはたらくことによって生じます。食行動が単にこのようなシステムだけで制御されているとしたら、私たちの多くは理想的な体重を維持しているでしょう。

飲食物がもたらす味覚情報は、ほかのどの感覚にもまして、食の動機づけの大きな要因となっています。人間や動物は、単に栄養素が不足したから（つまり、お腹がすいたから）食べるのでは

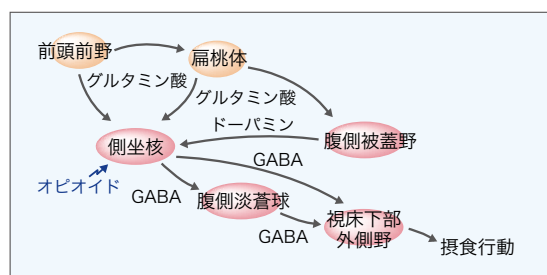


図1 味の快・不快情報に基づいて摂食行動を調節する神経回路。前頭前野や扁桃体で処理された味覚情報が側坐核などの脳内報酬系にリンクして、最終的に視床下部外側野のはたらきを調節していると考えられる。各経路でもにも作用する神経伝達物質を矢印の脇に示している。GABA：γ-アミノ酪酸。

なく、食物がおいしく感じられるから積極的に食べようとするのです。食物がおいしければ報酬として作用し、よりたくさん食べようとしています。反対に、食物のまずさは罰の効果を持ち、食べるのをやめてしまいます。図1は、このような味の快・不快が基本的な食行動の調節システムとどのように相互作用するのかを模式的に示したものです。

■味の好き嫌い生まれつきか、経験か

生まれて間もない赤ちゃんの口に、甘い砂糖水を少し入れてやると、トロツとしたにこやかな表情が生まれます。反対に、すっぱい水を入れると、顔をしかむくちやにして、文字通りすっぱい顔を作ります。この事実は、味の種類に応じて、生まれつき好き嫌いがあることを示しており、好きなものを取り入れ、嫌いなものは拒むという基本的な行動選択を反映しています。同じような表情変化は、大人でも無意識のうちに現れます。

一方、経験による味の好き嫌いの変化は、その後の食行動に大きな影響を及ぼします。たとえば、はじめて口にしました食物を食べたあとに腹痛や嘔吐などの不快症状が現れると、その次に同じ食物が目の前に出てきても、それを拒否して食べなくなります。この現象は人間だけでなく、動物にも広く見られるもので、誤って危険な食物を食べ

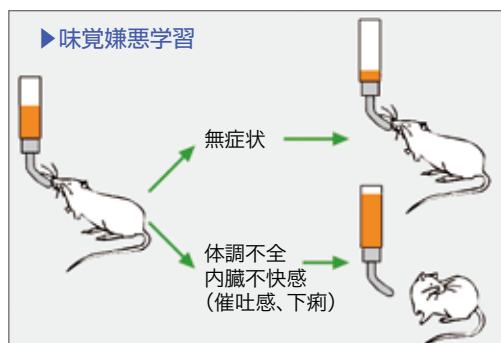


図2 味覚嫌悪学習の概略。動物にそれまで経験したことのない味刺激を与えたあと、有害な注射が無害な注射をする。無症状の場合は、次に同じ味刺激が与えられると、積極的に摂取する。一方、注射によって体調不良を経験した動物は、その味を危険なものとして記憶にとどめ、次に与えられたときには摂取を拒む。

ないように自分の身を守る意味があります(図2 味覚嫌悪学習)。このような現象が生じるのは、脳内で味の情報が、たとえ同じ味であっても、快から不快へと変化し、その記憶が呼び覚まされるためです。

また、同じ味の食物でも、空腹のときと満腹のときとは好ましさ著しく異なります。このように、味覚情報は、味の種類や強さを伝えるとともに、そのときどきの栄養状態や過去の経験によって変動する快・不快の程度を伝え、食行動の調節に本質的な役割を果たしています。おいしさは、食行動に駆り立てる重要な要因ですが、報酬効果が強いいため、とすれば食べ過ぎや肥満の原因となってしまう。ラーメン店への行列もほどほどにといったところでしょうか。

分子モーターでATPを合成

回転分子モーターをタンパク質やDNAの解析デバイスに応用

● 大阪大学産業科学研究所 教授

野地博行 — Hiroyuki Noji E-mail : hnoji@sanken.osaka-u.ac.jp

私たちの体を構成する細胞の中には、目に見えないほど小さなモーターが回転し、生命活動を支えるエネルギーの貯蔵・供給の働きをしている。野地博行教授は、直径10ナノメートル(10万分の1ミリ)という世界最小の回転分子モーターのメカニズムを解明。タンパク質やDNAの解析デバイスへの応用を視野に入れ、生体分子を1分子単位で検出・操作するデバイスの開発を進めている。



研究員の権佐和子さん。ATP合成酵素の動くメカニズムを探る



1分子計測を基にATPを合成

野地博行教授は東京工業大学の大学院生時代、たまたま参加したある学会で、光学顕微鏡と蛍光物質などを使って分子の一つひとつの動きを個別に観察できることを知り、衝撃を受けたという。それは大阪大学の柳田敏雄教授の研究発表だった。

その後、エネルギー源であるATP(アデノシン三リン酸)を作り出すATP合成酵素が回転する様子を直接観察し、1分子計測することに成功した。2001年からは東京大学生産技術研究所で、独自に開発した磁気ピンセットを用いて、ATP酵素の逆回転によりATPが合成されることを実証してきた。

05年に大阪大学に赴任してからは、共同研究を通じて1分子計測実験の幅を広げている。エネルギー変換や薬物輸送にかかわる膜タンパク質のメカニズムの解明もその一つ。薬物スクリーニングに応用できる平面膜チップも開発中だ。

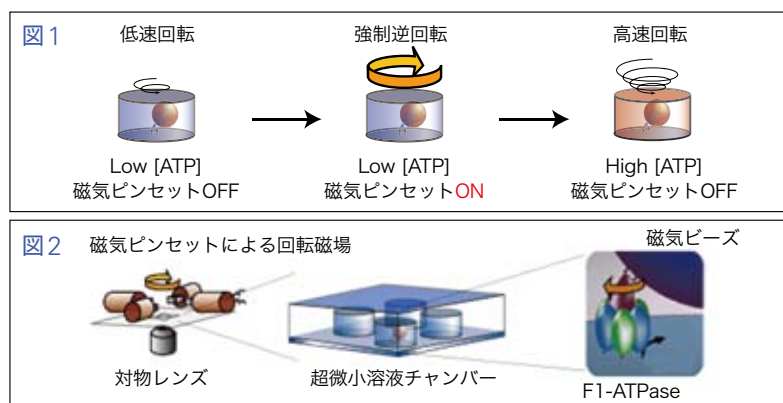
分子モーターの回転の向きで合成・分解

野地教授は、ATP合成は水力発電と同じ仕組みだという。

「水力発電機は、水が上から下に流れることにより、位置エネルギーを電気という全く形態の違うエネルギーに変換する装置です。水の流れるタービンで電気モーターを逆に回し、それに

よって電気をつくっています。分子モーターが回転してATPを合成する場合も、水素イオンがミトコンドリアの膜を移動する際のエネルギーを、化学エネルギーに変換しているのです」では、水素イオンの移動に頼らず、人工的に分子モーターを回転させてATPを合成させることは可能なのだろうか。

「微細な加工技術で作った非常に小さな試験管の中で、電磁石と磁気ビーズを使ってATPが合成される向きに分子モーターを回転させると、化学エネルギーであるATPが合成されます。強制的な回転をやめれば、自分で作っ



<図1, 2> <http://www.sanken.osaka-u.ac.jp/labs/smbio/sanken/jirei3.html>

野地教授は、マイクロ・ナノ加工技術を得意とする研究室と共同で、生体分子を1分子単位で検出・操作するデバイスを開発している。うまくいけば、1分子のDNAを迅速に検出・計測することが可能になる。また、薬剤スクリーニングチップを目指した、膜タンパク質チップに関する共同研究も進んでいる。

将来は、研究の原点であるタンパク質のメカニズムの追究とともに、新しい分子や生命システムをつくる方向を目指したいという。

現在、野地研究室のスタッフは25人。「知識と技術を総動員して問題を解決することは、パズルを解く作業に近い。それを面白く感じ、楽しむ姿勢が大事」という。

たATPを今度は分解しながら逆に回す。だんだんエネルギーが減ってくる」と止まる。そこで再び回してやると、また化学エネルギーが蓄えられます」つまり、分子モーター(ATP合成酵素)の回転の向きで、ATPの合成と分解という二つの反応が進む。これはおもちゃのミニカー「チョロQ」が、後進させて動力を蓄え、手を離すと前進するのと同じ動きなので、「分子チョロQプロジェクト」と名づけられた。回転数や回転速度、合成されたATPの分子数も詳細に計測され、プロジェクトは次の段階に進んでいる。

1分子対応の検出・操作デバイス開発

第40回 大阪大学中之島講座のご案内

今年度の公開講座「大阪大学中之島講座」は、大阪大学21世紀懐徳堂の主催により下記のとおり実施します。

〈統一テーマ「いまを生きるということ ～市民・社会と大学～」〉

サブテーマ(A)「ひとと社会を考える」／サブテーマ(B)「司法への参加を考える」／サブテーマ(C)「医療の仕組みを考える」

【会場】大阪大学中之島センター 7階 講義室2(大阪市北区中之島4-3-53)
TEL 06(6444)2100

【対象者・定員】対象：一般市民・学生 定員：各サブテーマ別 80名

※定員になり次第、締切させていただきますので、ご承願います。

【受付期間】サブテーマ(A)9月19日(金)～9月26日(金)必着／サブテーマ(B)10月10日(金)～10月17日(金)必着／サブテーマ(C)10月31日(金)～11月7日(金)必着

【お問い合わせ・お申し込み先】

大阪大学21世紀懐徳堂 中之島講座担当宛

TEL 06(6850)6443 FAX 06(6850)6449

E-mail: info@21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp

詳しくは、大阪大学21世紀懐徳堂ホームページ(<http://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp>)をご参照ください。

受賞

大竹教授、長谷川名誉教授に「日本学士院賞」

大竹文雄教授(社会経済研究所)、長谷川 晃名誉教授(工学研究科)



大竹教授(前列左端)と長谷川名誉教授(後列左から4番目)

原田明教授(理学研究科)

「Izatt-Christensen International Award」受賞

平尾俊一教授(工学研究科)「Vanadis Award」「Award for Outstanding Achievements in Bioorganometallic Chemistry」受賞

「環境リスク管理のための人材養成」プログラム(工学研究科)

「第12回(平成19年度)工学教育賞 文部科学大臣賞」受賞

中嶋英雄教授(産業科学研究所)「日本金属学会増量賞」受賞

西野邦彦助教授(産業科学研究所)「日本化学療法学会 上田泰記念感染症・化学療法研究奨励賞」「日本ビフィズス菌センター研究奨励賞」受賞

森重一教授(CSCD)

「第11回交通工学研究会(国土交通省・警察庁所轄)技術賞」受賞

花村周寛特任助教(CSCD)

「あっ!!と驚く位置利用サービスアイデア大募集」最優秀賞受賞

Schedule — ◇シンポジウム等

●経済学部OFC公開講義「国際経済と外航海運」

10月7日(火)からの原則毎週火曜日[全14回(予定)]、
法経講義棟3階5番講義室。

問い合わせ先＝オープン・ファカルティ・センター事務局
(TEL06-6850-5259、FAX06-6850-5268)

E-mail: ofc@econ.osaka-u.ac.jp

●医療経済・経営学(アストラゼネカ)寄附講座「医療経済・経営学」平成20年度公開講座

10月9日(木)から平成21年2月26日(木)までの第2・4木曜日[全10回(予定)]、大阪大学中之島センター。問い合わせ先＝(TEL06-6879-2610)

●International Symposium on Structures under Earthquake, impact, and Blast Loading 2008 (IB'08)

10月10日(金)～11日(土)、接合科学研究所荒田記念館。

問い合わせ先＝(TEL06-6879-4232)

●第22回日本心臓血管内視鏡学会

10月11日(土)、医学部銀杏会館。問い合わせ先＝第22回日本心臓血管内視鏡学会事務局(TEL06-6879-3441)

<http://www.act.med.osaka-u.ac.jp/pickup/jaoc.html>

●細胞を創る研究会(共催)情報科学研究科グローバルCOEプログラム若手研究者の国際ワークショップ

10月16日(木)～17日(金)、医学部銀杏会館。

問い合わせ先＝E-mail: info@jcsr.org

●第6回デザイン史デザイン学国際会議ICDHS2008OSAKA

10月24日(金)～28日(火)、大阪大学中之島センター他。

問い合わせ先＝ICDHS2008OSAKA事務局(TEL06-6850-5120)

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/icdhs2008osaka/>

●総合学術博物館 第3回秋季特別展

「21世紀の薬箱、新しい医療文化の形成～融合と先導『薬箱が語る世界から』(仮題)」

10月31日(金)～12月20日(土)、総合学術博物館待兼山修学館。

問い合わせ先＝総合学術博物館総務係(TEL06-6850-6715)

<http://www.museum.osaka-u.ac.jp>

●第8回薬物の分子設計と開発に関する日中合同シンポジウム

11月3日(月・祝)～5日(水)、神戸国際会議場。

問い合わせ先＝医学系研究科・藤原英明教授(TEL / FAX06-6879-2573)

●第6回母子手帳国際会議TOKYO2008

11月8日(土)～10日(月)、国連大学(東京)ほか。

問い合わせ先＝人間科学研究科国際協力論(TEL / FAX06-6879-8064)

●シンポジウム「明日もリスク・リスク管理のフロンティア」

平成20年11月21日(金)、ヒルトン大阪。

問い合わせ先＝「環境リスク管理のための人材養成」プログラム事務局
(TEL06-6879-4733) <http://risk.see.eng.osaka-u.ac.jp/>

●大阪大学フォトンクス先端融合研究センター第3回シンポジウム

「光とナノが創る科学と産業」

12月12日(金)、大手町サンケイプラザ(東京)。

問い合わせ先＝フォトンクス先端融合研究センター

(TEL06-6879-7927)

●セミナー「英語辞書と語彙指導」

12月13日(土)、サイバーメディアセンター(豊中)。

問い合わせ先＝サイバーメディアセンター・竹蓋順子准教授

E-mail: junko315@cmc.osaka-u.ac.jp

●大阪言語研究会第161回例会

12月26日(金)、待兼山会館。

問い合わせ先＝文学研究科・神山孝夫教授(FAX072-730-5338)

「大阪ルネサンス」掲げ天神祭船渡御出航



今年も天神祭の船渡御に阪大船が出航しました。阪大船の船出に先立ち、7月5日(土)には、船渡御の安全祈願と盛会を祈念するため、民族衣装や浴衣に身を包んだ16カ国23人の本学の外国人留学生が、天神祭の本宮である大阪天満宮に参拝し、代表者5人によりそれぞれの母国語で祭文奉納が行われました。

全員が武田佐知子副学長とともに本殿に参拝、慣れない正座に戸惑いながらも、厳かな神事に神妙な面持ちで船渡御の盛会や日本と母国の友好を願いました。参拝後は、同じく太鼓演奏を奉納した追手門学院の小学生のみなさんと記念写真を撮るなど、和やかな国際交流のひとつとなりました。

7月25日(金)、今年で4回目となる阪大船は、社会学連携活動の拠点となる21世紀懐徳堂の設置により、大阪の街を国際学芸都市に「大阪ルネサンス」を旗印に掲げました。



大阪天満宮に参拝する外国人留学生たち

阪大船には、熊谷信昭、岸本忠三、宮原秀夫の歴代総長をはじめ、卒業生、現教職員、育友会の方々、留学生等総勢163人が乗船しました。また、旧制浪速高等学校、旧制大阪高等学校のそれぞれ代表の方々も乗船されました。

今年は、京都産業大学が新たに奉拝船を



左から、京都産業大学 坂井東洋男学長、関西大学 森本靖一館長、大阪大学 鷺田清一総長、追手門学院大学 鈴木多加史学長

出され、船渡御の先輩格である関西大学、追手門学院とともに、出航前には、阪大船の船上で、本学鷺田清一総長と各大学の理事長、学長が互いに挨拶、エールを送りあい、各校オリジナルの法被を交換するなど、和やかな雰囲気の中で大学間交流の楽しいひとときもありました。

船上では、本学の高島幸次招聘教授が、天神祭の歴史や行き交う船についてわかりやすく説明を行い、落語家の林家花丸さんとの絶妙の掛け合いで乗船客を楽しませてくれました。

また、船上では恒例となった、本学応援団、チアリーダーの演舞と、軽音楽サークルのジャズの調べに、参加者から温かい拍手が送られていました。

司馬遼太郎記念学術講演会を開催



司馬氏の思い出を語り合う。(左から)辻井喬氏、安野光雅氏、平田オリザ氏

7月5日(土)、大阪大学司馬遼太郎記念学術講演会が大阪国際交流センターで開催されました。この講演会は、大阪外国語大学の卒業生である作家の司馬遼太郎氏の業績を偲び、その遺産を継承するため、学生、一般市民を対象として、比較文明的な視点から日本を論じる記念学術講演会としてこれまで開催されてきました。

昨年10月、大阪外国語大学が大阪大学と統合したことにより、講演会は、そのまま

大阪大学主催事業として引き継がれ、名称も「大阪大学司馬遼太郎記念学術講演会」として今年で11回目の開催を迎えました。

第1部では、作家で詩人の辻井喬氏と、画家の安野光雅氏をお招きし、司馬文学を分析するとともに、司馬氏のエピソードを交えながら紹介、講演が行われました。第2部では、司会に本学の平田オリザ教授を加え、「文化の力」と題して対談が行われ、司馬氏の思い出を語り合いました。

また、鷺田清一総長は、「大阪大学は、民間の学問所である適塾、懐徳堂が精神的源流であり、この講演会は市民の手による文化活動のひとつとしたい」と挨拶しました。

この講演会は、司馬遼太郎氏の没後(平成8年2月没)、千里ライフサイエンスセンターで追悼講演会が開催され、その後、司馬氏を偲び、記念する講演会を設置しようとする気運が高まり、平成10年に、豊中千里公民館と共催で第1回が開催されま



挨拶をする鷺田清一総長

した。第2回(平成11年)以降は、司馬氏と縁の深い産経新聞社との共催となり、司馬遼太郎記念財団の後援、大阪外国語大学同窓会(咲耶会)の協賛を得て、原則として毎年7月、サンケイホールと大阪国際交流センター(大阪外大上六校舎跡地)を会場として交互に開催されてきました。

講演会の内容については、産経新聞の紙面で紹介され、第6回までの講演内容は、『日本文化のまなざし』(河出書房新社)としてまとめられています。

NEXT ISSUE・No.42

【阪大ニュースレター】次号(42号)の特集予告

◎総長カフェのゲストとして、遠山敦子氏(財団法人 新国立劇場運営財団理事長)をお招きして、さまざまなご経験談をうかがいます。